



留学生便り

著者	池田 未紗, 吉川 梨香, 田中 みどり
雑誌名	独逸文学
巻	53
ページ	103-108
発行年	2009-03
URL	http://hdl.handle.net/10112/1036

[エッセイ]

留学生便り

1. 池田 未紗：コンスタンツの湖とモスク

早いもので私がコンスタンツに来てからもう5ヶ月が過ぎた。さまざまな理由をつけて留学という機会を得たが、正直なところその一番の理由は日本から出たいということだった。この留学のための選考試験があるということを知った頃、私はアルバイトにおいて幾つか悩みを抱えていた。人手不足からその職場を辞めることは簡単ではなかったため、国外へ出ようと考えた。勿論留学を思い立った理由はそれだけではなく、小さい頃から外国やその文化に対する慣れはあったし、親からも留学を半ば強要されていた。その憧れの外国で今私は単位取得状況からたくさんの授業に出てバリバリ勉強せざるを得ない状況に陥っている。そのため私がこちらで体験したことといえば大して多くはないかもしれない。

私は中国地方の日本海側、島根県で生まれた。ここコンスタンツには故郷の島根と同じく湖がある。渡航前からその湖では泳げるらしいということを知っていたが、正直、湖で泳ぐ人なんてそんなにいないだろうと思っていた。コンスタンツに着いたあと、翌月から始まる1ヶ月間の語学コースを控えた7月の終わり、たまたま知り合ったインド人の友達と街を歩いているうちに湖へ行ってみようということになった。行ってみると観光客やら地元の人やら、とにかく沢山の人達で湖の辺が賑わっていた。中に入って泳ぐ人や足だけ浸かっている人、何をすることもなく佇んでいる人、携帯で電話をする人などとにかく雑多な人達が湖に集まってくるという感じだった。私達もその場の空気と強い日差しに促され自然と靴を脱ぎ去っていた。水はひんやりと冷たく、碧かった。

さて、語学コースも終盤に入った頃、一人のヨルダン人と友達になった。彼女はイスラム教徒であった。そんな彼女と、もう一人イスラム教徒のドイツ人と一緒に遊ぶ機会があった。夕方のある時刻になった時、行かなければならない所があるという。どこなのかと尋ねるとモシェー

(モスク) だという。異教徒の私も入っていいものかという疑問はあったが、彼らについて行ってみることにした(私はイスラムに大きな興味を抱いていた)。そのモスクは、ライン川沿いを暫く歩いた、街の中心部から少し離れた所にあった。一階はケバブやら野菜やらを売る店になっていた。薄暗い入り口を進み階段を上る。その中にどんな風景が広がっているのか、異教の宗教施設の構造に対する私の興味は増していった。しかしその一方で、異教徒が中に入っているのかという不安はまだあった。そうこうするうちに私達はテラスのようなところに出た。空には月が輝いている。そこに女性の礼拝堂への入り口があった。私も中に入っているのかと聞くと、問題は無いということだった。靴を脱いで中に入るとシャンデリアが灯っておりほのかに明るい。人は私達の他には2人ほどいただろうか。ヨルダンの友達は何モスクに置いてある礼拝用の衣装に着替え始めた(その時洋服を着ていたためと思われる)。彼女が礼拝をしている間、椅子に座って礼拝の様子を見ている他に私にはすることが無い。細かい模様の装飾が壁や天井に施されている。また、吹き抜けになっているため二階から一階が見おろせるようになっていた。一階は男性の礼拝堂のようだ。壁側中央にイマームと思われる人がいる。間もなくアザーンが始まった。初めて聞くアザーンは今でも思い出せるほどの衝撃を心に残した。ムアッジンは自分の声だけでアザーンを響かせる。このモスクというものの構造も影響しているのかもしれないが、それは少なくとも異教徒の私の心にまで響くものであった。アザーンのミステイックな魅力に陶醉しそうになっていた私にヨルダンの彼女は写真を撮ってくれという。「おいおい、モスクで写真なんか撮っていいんですかい」と思ったが、気の強い彼女に逆らえず写真を撮ってやった。彼女は写真のモデルになるのが好きだった。そのあとカメラを貸してくれと言われ、カメラを渡した。彼女は散々写真を撮って満足したようだった。このヨルダン人とは少ししか一緒にいることは出来なかったが、とても濃い日々を過ごしたように思う。後日、彼女の帰国に伴う部屋の片付けに呼ばれ、お互いの宗教について語りあったりもした。

友達の間ではフェイスブックというソーシャルネットワークワーキングサービスやクラブ、ティラミスなんかが流行っている。私自身の息抜きは専ら伊丹十三の映画と歌を歌うことだ。伊丹十三に慰められながら明日も

勉強頑張ろう、と思う今日このごろである。

2. 吉川 梨香：ドイツ文化の体験

私はエアランゲン（Erlangen）という町に留学しています。それほど大きい町ではありませんが、大学都市なので学生がたくさんいます。もちろんたくさん留学生もいます。私は語学コースで様々な国から来た留学生と仲良くなり、一緒に手巻き寿司パーティーをしたり、会話をしたりしています。

ドイツでの生活で一番衝撃を受けたのは、毎週やってくる日曜日です。週末にほとんどの店が閉まる、なんていう習慣が存在しているというのは日本人の私にとっては思いもよらないことでした。こちらに来て最初の頃、日曜日何をしていたかわからず、戸惑いました。ドイツ人の友人に尋ねると、日曜日は友人を訪問する日、家族とゆっくり過ごす日だと教えてくれました。幸い、営業しているカフェがあるので、私の場合は友人とおしゃべりをしたり、勉強したり、小旅行に時間を使ったりしています。その他にも、必要以上に急かされるスーパーマーケットのレジに驚いたり、電車で知らない人同士が普通に会話し始める社交的な一面に日本との違いを実感したりしています。

また、大学側が提供してくれたプログラムで、クリスマスと新年を挟んでフライブルク（Freiburg）というフランスとスイスに近い町で、2週間ホームステイをしました。クリスマスにはプレゼント交換をしたり、一緒に教会に行ったり、大晦日には Gastfamilie の友人たちとパーティーを開き、12時が過ぎて新年になると同時に花火をしました。クリスマスや大晦日に関する日本文化との違いについても知りました。例えば、日本人にとってクリスマスは、特に若い人たちにとって、家族というより友人と過ごすことが多いと思いますが、宗教的な理由もあってドイツ人だけでなくヨーロッパのほとんどの国の人にとっては、家族と過ごす大切な時期なのです。ということで、クリスマスを前にたくさんの友人たちが故郷へ帰っていきました。同様に、大晦日はほとんどの日本人は家族と過ごし年が明けて新年を祝いますが、ドイツ人は基本的に地元の友

人たちとパーティーをして楽しむ日と捉えているらしいです。

Adventの時期(クリスマス前4週間のこと)になると、Christstollenといって干しぶどうやアーモンドの入った独特のケーキがたくさんパン屋さんに並び、さらに様々な種類のPlätzchenというクッキーを各家庭で焼きます。それだけでなく、町にはイルミネーションが飾られ、大小はありますがどの町でもクリスマスマーケット(Weihnachtsmarkt)が開かれます。そこでは、Bratwurstや甘いお菓子、そしてGlühweinやPunschを飲むことができます。特にこの時期の夜はとても気温が下がっていて寒いのですが、たくさんの人がそこを訪れ、温かい飲み物を片手に立ったままおしゃべりをしている姿がとても目立ちます。9月にも一度非常に冷えた時期があったのですが、にもかかわらずカフェの外でコーヒーを飲む人がいたのを思い出すと、こちらでは寒さなんて関係ないのかもしれないです。特に私達日本人にとってちょっとした魅力なのは、マグカップ交換制のため、飲み物代+デポジットと少し料金は高いのですが、温かい飲み物の入っていたマグカップを持って帰ることが可能な点です。私もWeihnachtsmarktからカップを二つ持って帰ってきました。友人の中にはさらに多くの異なる町のカップを持っている人もいます。記念になるだけでなく、利用できる点もいいです。もちろん持って帰らず、そのまま返すこともできますが。

様々な文化を知ることができるヨーロッパ、ドイツでの生活は私にとってとても刺激的なものとなっています。日本にいたら経験できないことが経験できるからです。もちろん正直に言って日本の食べ物には恋しいのですが……。こちらに来てもう4カ月が過ぎました。Die Zeit fliegt wie ein Pfeil. 月日の経つのはあっという間のようです。日本に帰国したときに最高の経験ができたと思えるような留学生活を送りたいと思います。

3. 田中みどり：ゲッティンゲン留学体験記

ゲッティンゲンは、大学の町といわれており、自然も多くのどかでも勉強するには適したところ。外へ出ると必ず何人かの知人に会うくらい小さな町です。また、路面電車はなく、町の移動にはほとん

どの学生が自転車を使っており、その交通量が多いので自転車の町とも言われているようです。

留学生活もすでに4ヵ月がたち、こちらの生活にも慣れてきました。私の住む学生寮は、女3人共同でキッチン、トイレを使っていますが、トラブルはありません。私は毎日日本食を作るのですが、よく3人で一緒に食事もします。その際、それぞれの国の文化について、また学校のできごとから、たわいないことまでいろいろ話します。ここでは私にとって彼女達が一番よい理解者となってくれています。周りの友達の話の聞いていると、それぞれ寮でのトラブルがあるらしく、それに比べて私はルームメイトに恵まれ、本当によかったと思っています。

授業は主に留学生向けの語学の授業を履修しています。初めは聞き取ることさえ難しかったのですが、徐々に慣れてきて少しずつ理解できることが増えてきました。クラスは15人から20人の少人数で、アットホームな雰囲気の中、文法と会話中心の授業です。時間がたつにつれ発言することに大きなストレスは感じなくなり、友達の助けもあり、授業に取り組む姿勢も積極的になってきたところです。

語学の授業ではドイツ人と知り合う機会がないので、週に2回日本語を勉強しているドイツ人学生と会い、お互いの国についての質問をしたり、文法や口語を教えあっています。この時間が一番密度濃く有意義にドイツについて学べていると思います。また、逆に日本のことを教わることも少なくありません。

授業以外の時間も充実しています。週に1度友達と大学のスポーツ施設へ行き、バレーをしています。週末にはいつもゲッティンゲンの出舎に住んでいる知り合いの家を訪れて、一緒にケーキを焼き、散歩をします。昔からの知り合いでとても仲がよく、一度、結婚式にも招待してもらいました。結婚式は近くの古城で行われ、友人が是非着物で着てほしいということで、私は浴衣で参加しました。かしこまった式を想定していて少し緊張していましたが、実際は、式の途中で笑いがあったり、ウエディングケーキをみんなで作って持ち寄ったりと、和やかな雰囲気で行われました。ライスシャワーやグリュウワイン、丸太カットなど、典型的なドイツの結婚式のイベントもあり、貴重な体験ができました。

クリスマスと年越しは、ヴィルヘルムスハーフェンとノイブランデン

ブルクに住むドイツの友人宅へお邪魔しましたが、こちらも興味深いものでした。

この4ヵ月で学んだことは、いろいろありますが、失敗を恐れなくて何でもチャレンジするべきだということです。私は失敗することははずかしいと思いますが、周りにはそうは感じていないようで、何でも発言してみる、何でも挑戦してみる、そういう度胸があるようです。言葉はよくないかもしれませんが、冗太くなる必要があり、私のものさしでは少し出しゃばっているかなと思うくらいが丁度いいのだと気がつきました。もう一つは、「話したいことがない。」ということです。というのは、ドイツ語を話せるようになりたい、いろんな人と話したいと思ってきたのですが、いざ話す段になると、何を話していいのかわからず、いつも話を聞く側か質問に答えるだけになってしまっていました。本当に自分が言いたいこと、伝えたいことが明確になっていない。ときには質問にも十分な回答ができない。語学力の問題もありますが、知識のなさを痛感しました。これらは留学以前によく言われたことですが、身を持って体験できたことで、本当にその意味、大切さが分かりました。少し時間はかかりましたが、次のセメスターへつなげることができそうで、今は今後の自分に期待しています。

この4ヵ月で私は様々なことを学びましたが、もっと積極的に、もっと自分から行動を起こせば、まだまだ新しい発見に出会えると思います。残りの7ヵ月は、自分の課題も見え、すべきこともはっきりとしました。気持ちにも余裕も持てたところで、今から再出発という心境です。